

おやつ場面における幼児と保育者の会話の様相 —初めての「おやつ」をめぐる—

吉 澤 千 夏*・上 村 佳世子**

(令和6年10月9日受付；令和6年10月24日受理)

要 旨

本研究は、3歳児が食事場面において表出する食スクリプトを捉えるとともに、幼児と保育者の食に関するやりとりの様相について明らかにすることを目的としている。具体的には、対象児のおやつ場면을観察し、そこで生じた幼児と保育者のやりとりについて食スクリプトの視点で分析を行った。分析の結果、以下の点が明らかとなった。

(1) おやつ場面における幼児のメインスロットは「食べる」を中心とし、「いただきますという」「ごちそうさまでいう」のような食べることにまつわる枠組みの提示と、「食べる」ことを「おいしいという」ことで意味づけるスロットで構成されていた。

(2) おやつ場面における幼児のサブスロットは、食べる前のテーブル・椅子等の準備や片付け、衛生等に関するスロット、バナナの「皮を剥く」「おかわりをする」スロットで構成されていた。

(3) 幼児と保育者のメインスロットを含むやりとりでは、食事の開始を意味する「いただきます」を一斉に行ったり、幼児自身が食べることを「おいしい」と意味づけるスロット等を表出していた。保育者が主導しつつも、子どもによって表出可能なマナーに関するメインスロットによるやりとりが構成可能であった。

(4) 幼児と保育者のサブスロットを含むやりとりでは、食べるための準備に加えて、食べる前の消毒や食後にバナナの皮を捨てる等について保育者が度々言及しており、保育の場において衛生や片付けが重要視されていることが示唆された。また保育者は、おやつ場면을栄養摂取の場としてだけでなく、文化的な場とし、それにふさわしいふるまいを学ぶ場として機能させていることが示唆された。

KEY WORDS

3-year-old children 3歳児, snack time おやつの時間, conversation 会話, teachers at kindergarten 保育者

1. 緒言

「食べる」ことは生命を維持するために不可欠な行為であり、生きるための基本的な行為といえる。その一方で、「食べる」ことは文化的に意味づけられ、彩られた様々な側面がある。例えば、生きるための食、と考えるならば、献立に悩んだり、味にこだわることはなく、栄養的に十分な食品を摂取すればよい。また、食べる場所や用いる食料、食具や食器等についても考慮する必要はない。しかし人は、食事する際には「いつ」「どこで」「誰と」「何を」食べるかを考え、状況に応じて適切なものを選ぶ。このような食の文化的側面は私たちの生活をより豊かにしてくれる。では、この食に関わる文化は、いつ、どのように獲得されていくのだろうか。

食に関する生活文化は多岐にわたるが、その一つとして、食に関する知識としての「スクリプト」がある。スクリプトとは生活をする際の基礎的な枠組みを構成する知識⁽¹⁾を意味する。様々な生活に関わるスクリプトのうち、食事に関するスクリプトは「食べる」行為とその前後に行われる行為や発話に関する手続き的知識で構成されている。例えば、「食べる」ためには「何を食べるか」を考え、そのために調理し、食器や食具を準備して盛りつける。それをテーブル等にセッティングしたり、他者に供したりした後、食べる。その際、「いただきます」と言って食べ始めたり、「おいしいね」と言いながら、食べ物について話したり、目の食とは異なる会話を楽しんだりする。そして食べ終われば、「ごちそうさまでした」と言って、食器や食具を片付ける。このような食に関わる手続き的知識のうち、主要な行為と発話を時系列的に並べたものを食に関するスクリプトの「メインスロット」といい、メインスロットには含まれないものの、食に関する時系列的な知識に含まれる行為や発話を「サブスロット」という⁽²⁾。幼児の食に関するメインスロットの獲得については、母子のままごと遊びの観察及び分析から知見が得られている。具体的には、1歳時の幼児と母親のままごと遊びにおいては、日常的な主要行為である「食べる」「飲む」が中心であり、そ

*自然・生活教育学系 **文京学院大学

れ以外のスロットは母親から表出されていること⁽³⁾、2歳時になると「食べる」「飲む」スロットの表出に加え、調理や供給に関するスロットの表出が増えること⁽⁴⁾、3歳時になると、量的な差異はあるものの、すべてのメインスロットが表出されるようになるとともに、幼児からは「食べる」「飲む」よりも、むしろ調理や供給、片付けに関するスロットの表出が増え、日常生活では経験することの少ないスロットについても知識として獲得されていることが明らかにされている⁽⁵⁾。これらの結果は、主だったスロットは3歳までに獲得されているとした先行研究⁽⁶⁾を裏付けるものである。また、上記のような幼児のスロットの表出に対して、母親は子どものスロットを促したり強化したりするようなスロットを多く表出し⁽⁷⁾、子どものスロットに関連するスロットを付与したり⁽⁸⁾、応答的なスロットを表出することで食スキプトの構造化を図っていることが示唆されている⁽⁹⁾。

以上のことから、生活文化的知識の習得という点において、3歳児は十分な知識を有しているといえる。しかし、これらの知識はままごと遊びという虚構の中で表出したものであり、実際の生活の中で行われたものではない。生活に関わる知識は、それが実際の生活の中で生かされてこそ意味を持つと考えるならば、「知っている」とことと「出来る・使える」ことには違いがあり、「出来る・使える」ことが生活の中では求められる。また、上記の研究では、メインスロットの獲得について分析しているものの、サブスロットの知識化についての分析には至っていない。

そこで本研究は、3歳児の実際の食事場면을対象に、食スキプトを構成する要素であるメインスロットとサブスロットの表出状況を捉え、知識としてすでに獲得されているスロットが実際の食事場面でどのように表出されているかを明らかにする。さらに、幼児のみならず保育者が表出するスロットについても着目し、幼児と保育者のやりとりの様相についても明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2. 1 調査対象

研究対象者は、N県J市内のJ幼稚園の年少児、男児5名、女児9名の計14名及びクラスの担任保育者2名であり、幼稚園でのおやつ時間を対象場面とする。

2. 2 調査時期

観察時期は2014年4月であり、幼稚園入園後まもない時期に実施された昼食、おやつ時間のうち、初めておやつが供され、食べた日の様子を対象とする。この日を対象としたのは、幼児がまだ幼稚園での食を体験しておらず、幼稚園での食スキプトを獲得する前であり、幼児のもつ食に関する知識がどのように実際の場面で表出されるかを捉えるのに適していると考えられたこと、またそういった状況において保育者が幼児に対して表出するスロットの様相を捉えることは、幼稚園の食スキプトの中で保育者が特に教示したい重要なスロットであり、それを捉えられると考えたからである。

2. 3 調査の内容及び方法

本研究は、3歳児の初めてのおやつ場면을対象とし、そこで表出される対象者のやりとりの様相を捉えることを目的とする。対象者のやりとりを捉えるために、保育室内に2台の小型ビデオカメラを設置し、保育室全体の様子を捉えると同時に、対象者の行為を録画する。さらに対象児がおやつを摂る際に使用するテーブル毎に1台ずつICレコーダーを設置し、対象者の発話を録音する。録画及び録音にあたっては、おやつの準備としてテーブルの設営が始まった段階でビデオカメラとICレコーダーを順次セットして録画及び録音を開始し、対象児がおやつを食べ終え、保育者がテーブル等の片付けを始めた段階でビデオカメラとICレコーダーによる録画及び録音を終了する。

2. 4 分析方法

分析にあたっては、ICレコーダーで録音された音声について、おやつに関連する会話が表出され始めた時点からおやつに関する会話が終了した時点进行分析対象とする。対象となった場面の発話について、録音された音声から発話のトランスクリプトを作成するとともに、その発話がなされた際の対象者の行為についても映像を基に記録する。さらに作成されたトランスクリプトは「食に関するスキプト」⁽¹⁰⁾のうち「『食べる』に関するスキプト」(表1)を基に発話と行為を分類する。

3. 結果及び考察

3. 1 おやつ場面スクリプトの要素としてのスロット

調査対象となったおやつ場面の概要について記述すると、まず、対象児がおやつを摂る際に使用するテーブルが保育者によって準備され、対象児がイスを自身の決まった席に運び、着席する。1テーブル当たりの人数は3名から4名である。当日のおやつはバナナであり、1本を2等分した状態で保育者によって保育室に運ばれてくる。最初に幼児に対して一人当たり一つずつ供され、各自で食したのち、おかわりが欲しい幼児に対してはおかわりとしてさらに一つ、バナナが供されている。その後、残ったバナナの皮を指定された場所（ビニール袋）に入れ、各自が座っていたイスを所定の位置に片付けた後、歯磨きをして、おやつ場面は終了となっている。撮影が開始されてから、おやつの喫食が終了し、テーブルの片付けが行われるまでの所要時間は15分である。

以上を踏まえ、対象となったおやつ場面について、表出された行為と発話を食に関するスクリプト⁽⁴⁾（表1）に基づき分類する。食に関するスクリプトは母子のままごと遊び場面において表出される発話または行為を時系列的に表示した、食にまつわる手続き的知識の集合体である。それを構成する要素のうち、特に多くの母子から表出された発話と行為を「メインスロット」とし、それ以外の発話と行為を「サブスロット」としている。分類にあたっては、食に関するメインスロットと同様の行為・発話は「おやつ場面におけるメインスロット」に分類し、食に関するメインスロットには見られなかった行為・発話については「おやつ場面におけるサブスロット」に分類する。

3. 1. 1 おやつ場面のメインスロットの様相

表1によれば、食に関するメインスロット14項目のうち、おやつ場面のメインスロットとして表出されたのは、「おやつの内容を伝える」「おやつを供する」「いただきますという」「食べる」「おいしいという」「ごちそうさまでいう」「おやつ後の片付け」の7項目である。一方、「調理」や「盛り付け」に関するスロットの表出は見られない。これはその日のおやつがバナナであったことから、調理も盛り付けも特に必要とされず、「切る」については保育室に運ばれた際に終了していたことに起因している。

幼児にとって飲食はそれぞれのものが主要な行為であり、日常生活の多くの場面で、幼児に供される飲食物、それを食べるための準備や調理等は家族や保育者等によって行われることが多い。今回のおやつ場面においても、上記の7項目のうち、子ども自身から表出されたメインスロットは「いただきますという」「食べる」「おいしいという」「ごちそうさまでいう」「おやつ後の片付け」の5項目であり、「おやつの内容を伝える」「供する」は保育者によって行われている。また「おやつ後の片付け」は、バナナの皮を所定の場所に捨てるといった単純な作業である。

このことから、おやつ場面における幼児のメインスロットは「食べる」を中心としてその前後に「いただきますという」「ごちそうさまでいう」という食べることにまつわる枠組みの提示と「食べる」ことを「おい

表1 おやつ場面において表出されたスロット

「食べる」に関する メインスロット（吉澤等 2001）	おやつ場面の メインスロット	おやつ場面の サブスロット
		テーブルを所定の場所に置く テーブルクロスをかける テーブルクロスを消毒する 幼児の座席の確定 椅子を運ぶ 正しい姿勢で座る 手の消毒をする 水筒の準備 おやつを運び入れる
献立の決定	おやつの内容を伝える	
切る		
材料をナベ等に入れる		
ガスコンロにのせる		
コンロのスイッチを入れる		
レンジに入れる		
レンジのスイッチを入れる		
盛り付け		
供する	おやつを供する	手を膝において待つ
いただきますという	いただきますという （一斉に行う）	
食べる	食べる	皮を剥く おかわりをする
おいしいという	おいしいという	
ごちそうさまでいう	ごちそうさまでいう	
片付け	おやつ終了後の片付け （バナナの皮を 所定の場所に捨てる）	椅子を元の場所に運ぶ 歯磨きをする テーブルクロスを拭く テーブルを干す テーブルを拭く テーブルを片付ける

しいという」ことで意味づける行為・発話で構成されているといえる。

3. 1. 2 おやつ場面のサブスロットの様相

次に、おやつ場面のサブスロットについてみる（表1）と、メインスロットと関連するサブスロットが9項目、メインスロットとは関連しないサブスロットが9項目表出している。

まず、メインスロットに関連するサブスロットをみると、「食べる」と関連して「皮を剥く」「おかわりをする」が表出されている。また、「おやつ終了後の片付け」に関連して「椅子を元の場所に運ぶ」「歯磨きをする」「テーブルクロスを拭く」「テーブルクロスを干す」「テーブルを拭く」「テーブルを片付ける」が表出されている。一方で、メインスロットには該当する項目がないものの、実際のおやつ場面でみられたのは、「テーブルを所定の場所に置く」「テーブルクロスをかける」「テーブルクロスを消毒する」「幼児の座席の確定」「椅子を運ぶ」「正しい姿勢で座る」「手の消毒をする」「水筒の準備」「おやつを運び入れる」といった食べる前のテーブルと椅子等の準備や衛生等に関するスロットである。

当日のおやつはバナナであり、皮がついたまま供されていたことから、食べる際には「皮を剥く」行為が必要となる。また、幼児それぞれに最初に供されたのはバナナを1/2にカットしたものであり、幼児の空腹具合等に合わせて食べる量を調整することが可能になっていた。そこで保育者は「おかわりをする」ことが可能であることを幼児に伝え、それを受けて幼児のうち大部分が「おかわりをする」行為を行ったといえる。さらに「おやつ終了後の片付け」については、椅子を元の場所に片付けた後、歯磨きをすることを保育者から促され、幼児はそれらの行為を行っている。その後保育者は、テーブルクロスやテーブルの片付けを順次行っている。このテーブルクロスやテーブルの片付けは、食べる前に行われていたテーブル等の準備に対応しており、おやつが始まる前の重要な行為として実施されている。また、食に関するメインスロットには表出されていないものの、食事前の手の消毒や食事後の歯磨きは、幼児の生活習慣として重視されており、実際のおやつ場面においても表出していると考えられる。

3. 2 おやつ場面の発話の様相

次に、おやつ場面で表出された対象者のやりとりについて、特に幼児と保育者の発話に注目し、その様相を捉える。

3. 2. 1 おやつ場面のメインスロットに関わる発話

おやつ場面のメインスロットで最初に表出されたのは「おやつの内容を伝える」である。その際の幼児と保育者のやりとりを表2に示す。なお、Tは保育者による発話、Cは子どもによる発話を意味する（以下、同様）。また、それぞれの後に丸数字がある場合は特定の対象者を示しており、ない場合には全員で発話等を行ったことを示す。

保育者はまず、おやつ配付について言及したのち、「じゃーん、これなーんだ。」といって、山盛りになったバナナを幼児に見せる。すると幼児たちからは「ばななー。」という大きな声上がる。それに対し保育者は正解であることを告げるとともに、バナナの皮を剥いて食べることを伝え、幼児は口々に「たべられる。」「たべられない。」と答える。さらに保育者は「おかわり」が可能であることを伝えている。最初の保育者の言葉かけには、おやつの内容を単純に伝えるの

表2 「おやつの内容を伝える」

T①:	じゃあね、そうしたらね、今日のおやつをこれから配ります。 今日のおやつはね、じゃーん、これなーんだ。
C	: ばななー。
T①:	せいかーい。みんなにバナナ配るから、皮剥いて食べられるかな？
C	: たべられない。 たべられる。
T①:	おかわりあるから、これ一つ食べて、もっと食べたいなーって人は、おかわりもらいに来てね。

ではなく、クイズのような問いかけをすることでおやつに対する子どもの興味を引く効果があると考えられる。大人にとってのおやつとは異なり、幼児にとってのおやつは補食としての意味を持つ。成長著しい一方で、消化器官が未成熟な幼児にとって、1日3回の食事では十分な栄養やカロリーを摂取することは難しい。そこで3回の食事を補う役割を「おやつ」が果たすことになる。その一方で、幼児にとって「おやつ」は食事とは異なる「楽しみ」の食としての側面を持つ。例えば、給食や弁当などにおいてはなかなか食が進まない幼児であっても、「おやつ」となると喜んで食べる様子が見られる。研究対象となったおやつ場面においても、保育者の問いかけに対して幼児たちが大きな声で答えている様子から、「おやつ」への期待感を高めようとする保育者と楽しみにしている幼児たちの姿がみとれる。

次に、「供する」場面でのやりとり（表3）をみてみると、バナナを配付する際、保育者は「手をお膝」にのせて「いただきます」をするまで待つように伝えている。そして、一人に一つずつ配る際にも「手をお膝に」「いただき

ますをするまで触らない」と子どもたちに度々伝えている。「供する」場面においては、サブスロットである「手を膝において待つ」ことにより「いただきますという」前にはおやつに触らないといった、マナーに関する声かけがなされている。幼稚園入園後、初めてのおやつということもあり、おやつを食べる際のルールを幼児に理解させるために、一人ひとりにわかるように声かけをしていることがうかがえる。

さらに「いただきますという」「食べる」「おいしいという」「ごちそうさまという」「片付け」の一連の流れの中で表出される幼児と保育者の発話(表4)をみると、保育者が「いただきますという」ことで、幼児はそれに呼応するように「いただきますという」。そして食べ始めると、保育者はその様子をみながら幼児に「おいしいという」。そして子どもたちが食べ終わる頃になると、まず全体向かって、椅子を片付け、歯磨きをするといったサブスロットを表出しつつ、おやつの片付けとしてバナナの皮を持ってくるように促している。ここで興味深いのは、「ごちそうさまという」を一斉に行わない点である。一般に、「いただきますという」「ごちそうさまという」は対になっており、食べ始める際に「いただきますという」、食べ終わったときに「ごちそうさまという」ことが一般的である。対象となったおやつ場面でも、全員で一緒に食べ始めるためにすべての幼児にバナナが配付されるまで待ち、一緒に「いただきますという」ことから「食べる」ことが始まる。しかし、対象児の発達や経験等が異なるために、食べる速度や量に違いがある。そのため、「ごちそうさまという」と一斉に行わず、食べ終わった幼児から順次、片付けを行うようにしていると考えられる。また、バナナが食べきれずに保育者の元へやってきた幼児に対して、保育者は「ごちそうさま。」と声をかけ、それに呼応するように当該幼児も「ごちそうさまでした。」と発話している。これは「ごちそうさまという」ことが単に食べ終わった際の挨拶というだけでなく、この発話そのものが喫食の終了を意味する言葉として機能していることを示している。

先行研究⁽¹²⁾⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾において、3歳までの幼児のままと遊びの中心スロットは飲食から調理に関するものへと変化する一方で、食事前後のあいさつや「おいしいという」といった食事時のマナーや食べることを意味づけるスロットの表出は母親と比較して少ないことが明らかとなっている。このことから、マナー等に関するスロットの獲得が3歳以降になると考えられ、そのために保育者が供する際に食事前のマナーに関する発話を丁寧に行っていることが示唆される。

3. 2. 2 おやつ場面のサブスロットに関わる発話

サブスロットに関する幼児と保育者のやりとりは多岐にわたり、なかでも「食べる」前の準備に関するやりとりが

表3 「供する」

T①: じゃあ、みんなのところにこれから配るから、“いただきます”するまで手はお膝で待っててね。
C : はい(大きな声で)。
T①: 出来る? いただきますしたら、ね。じゃあ、いくよ
はい、配るよ。ハイどうぞ(クラス全体を見渡す)
手はお膝にして待ってて。みんなで一緒にいただきますするから。
C : はい(大きな声で)。
T①: まだ触らないよ(やさしく)。
C : はい(大きな声で)。
T①: ハイどうぞ(一人ずつ目前にバナナを置いていく)。
C : ありがとう。
T①: あら、ありがとうだって。うれしい。
(後略)

表4 「いただきますという」～「片付け」

T①: よし、じゃあ、いただきます、するよ。じゃあ、いただきます、いきますよ。
みなさんじゅんぴはいいですか?
C : いいです。
T①: はい、じゃあ手を合わせてください。いただきます。
C : いただきます。
T①: どうぞ。
(食べ始める)
(略)
T①: あら、みんな、おいしい?
もうC①ちゃんないね。早かったね。
C①: おいしい。
T①: あら、C②くん、よかった。
おいしい?
C②: おいしい!
T①: あら、よかったわね。結構食べた?
(略)
(食べ終わった幼児をみて)
T①: じゃあね、食べ終わった人はね、今度、椅子を片付けて、歯ブラシです。出来るかな?
C : できます。
T①: うわ! やった!
(略)
T①: C③ちゃん、じゃあ、皮持ってきて。
(略)
(食べきれない幼児C④がT①のもとにやってきて)
T①: あ、もういらん? わかった。じゃあ、ごちそうさま。
C④: ごちそうさまでした。

多くみられる。対象児にとって、この日のおやつは幼稚園で初めて体験するおやつであり、初めて経験する手続きが多数含まれている。テーブルやテーブルクロスの準備については保育者が行っており、幼児がそれに関わることはない。一方で、「椅子を運ぶ」「正しい姿勢で座る」「手の消毒をする」「水筒の準備」のように、幼児自身が「食べる」ために事前に行わなければならない行為がいくつかある。そこで本項ではまず、その際の幼児と保育者のやりとりに注目し、考察を行う。

保育者はまず、テーブルを所定の位置に設置し、それらにテーブルクロスをかけた後、消毒を行っている。その後、椅子を持ってきた幼児に対して座席を示し、そこに椅子を置いて座れた幼児に対して「上手に座れているね」とほめた後、幼児の手の消毒を行っている（表5）。この際、2名の保育者は幼児の前で消毒の仕方を師範したうえで、一人ひとりの手に消毒液を吹きかけ、「ごしごしごし」と消毒液のついた手をこすり合わせるように声かけしている。この行為は今回のおやつ時間の中でも特に丁寧に行われており、時間もかけている（1分8秒/15分）。対象となったおやつ場面はコロナ禍前に撮影されたものであり、食事時の手の消毒は家庭においては一般的ではなかったと思われる。加えて、幼稚園での初めてのおやつであったことを考慮すると、消毒液を手に塗布された後に、手をこすり合わせて消毒する行為は対象児にとっては馴染みのないものであったと考えられる。それ故に、保育者は幼稚園のおやつや食事時のスロットである「手を消毒する」ことを時間をかけて幼児一人ひとりにわかるように声かけをしていたことが推察される。またこのことから、食事前の「手を消毒する」行為は、対象となった園においては重要なスロットと位置付けられていることが示唆される。手の消毒後は、保育者が「水筒の準備」を促し、幼児が自ら準備している。保育者も言及しているように、食事時に喉が渇く可能性がある。そうなれば途中で席を立つことになり、座って落ち着いて食事することが阻害されることにもなりうる。「食べる」前の準備は、幼児が衛生的にもマナーとしても、安心して食べることが出来るようにするために重要なスロットを多数含んでいるといえる。

次に「食べる」際のサブスロットである「皮を剥く」での幼児と保育者のやりとりをみる（表6）。当日のおやつはバナナであり、皮つきである。食べるためには皮を剥くことが必要となる。皮を剥いて食べ始める幼児がいる一方で、「むけない」という幼児も散見される。その際、保育者は励ましたり、他児の様子に気付かせたり、少し手伝う

表5 「食べる」ための準備

T①：（座席を確認して、幼児を座らせる）
上手に座れてるね。
C④：なにこれ？
T①：これ、しゅっしゅって消毒。
じゃあ次、そうしたら、みんなのおててをきれいに消毒しまーす。
C：はい。
T①：じゃあ、おててだしてくれる？先生、しゅってするから。ごしごしできる？
C：うん。
T①：K先生みてて。いくよー。
T②：はい。
T①：座って待ってて。C⑤ちゃん、座って待ってて
みんなのところに先生が回っていくから、こうやっておてて出して、シュって一回するから、ごしごしごし。できる？
C：はい。
T①：じゃあ、いくよー。
はい、しゅっ。ごしごしごし（繰り返す）。
はい、おてて出して。
C⑥：OK！
（略）
T①：そしたら、おやつときは喉が渇いちゃうかもしれないから、水筒を持ってきてほしいの。持ってこれる？
C：もってこれる（水筒をもって、各自席に戻る）。
T①：水筒ない人いますか？
C⑦ちゃんのあるかな？あ、あった。C⑦ちゃんのステキな水筒。はい、C⑦ちゃん、どうぞ。

表6 「皮を剥く」

C⑧：かわ、むけなーい。
C⑨：むけなーい。
T①：剥けない？頑張って剥いてみて。
（剥いている子を見ながら）あ、出来た出来た出来た。あ、C⑩ちゃん上手。
C⑪：むいてー。
T①：C⑪ちゃん上手。C⑫くん、あんな風にして剥くんだわ。あんな風にして剥くんだわ。
あれ？できるかな？
C⑪：できなーい。
どうしてやわらかいの、これ。
T①：C⑪ちゃん、剥ける？
C⑪：うん、むける。
T①：ここをちょっと引っ張ったらいーんじゃない？あ、できたできたできた。
C⑪くん、できた。あ、食べた。
C⑬：できない。
T②：できない？C⑬くん出来る？
C⑬：できない。
T②：じゃあ、ちょっとだけ。ほら、ここ、剥ける？ほら。
C⑬：ほんとだ、むけたー。わー、やったー。
T①：あら上手。

などして、幼児自身がバナナの皮を剥いて食べられるように関わっている。もし「食べる」ことが第一に優先されるのであれば、バナナの皮を剥いた状態で供すれば、幼児は簡単に「食べる」ことが出来る。しかしあえて皮を剥かず、剥けない幼児が剥けるように声かけ等を行うのは、保育者がおやつ場面においてバナナの「皮を剥く」ことを意図し、位置づけているからであると考えられる。それは、自立性を養ったり、手指の巧緻性の向上を図ったりする等の理由が考えられるであろう。

さらに「おかわりをする」場面では、食べ終わった幼児におかわりをするか確認し、残ったバナナの皮を所定の場所に捨てる（「おやつ終了後の片付け」）ように促している。おかわりを希望する幼児にはその都度、表7にあるような言葉かけと対応を行っており、「食べる」→「片付け」の手順を繰り返し行うことで、食べた後には「片付け」ることを強化しようとしていると考えられる。

最後に、「片付け」に関するサブスロットの表出に伴う幼児と保育者のやりとりを捉える（表8）。先にも述べたように、ある程度、幼児がおやつを食べ終わった頃を見計らい、全体に向けて、食べ終わったら椅子を片付け（「椅子を元の場所に運ぶ」）、歯ブラシ・歯磨き（「歯磨きをする」）を促している。その後、さらに個別にそれらを再度促すことで、「食べる」が終了した後の手順を伝えている。おやつ場面において、もちろん「食べる」ことは重要であり、中心的な意味を持っている。しかしその一方で、「食べる」ことの前後には多様な手続きや手順があり、それらがおやつ場面においても表出されている。これは、保育の場における「おやつ」が栄養摂取の場としてのみならず、文化的な意味での食の場面として、それにふさわしいふるまいを学ぶ場として機能していることを意味していると考えられる。

表7 「おかわりをする」

T①：あら、C⑭ちゃんおかわり？
C⑭：（うなづく）
T①：じゃあ、皮を持ってきて。ここに入れてください。
C⑭：おかわりください。
T①：そうね、そういうのね。はい、どうぞ。

表8 「椅子を元の場所に運ぶ」「歯磨きをする」

T①：じゃあね、食べ終わった人はね、今度、椅子を片付けて、歯ブラシです。出来るかな？
C：できます。
（中略）
T①：C⑪くん、椅子片付けよう。
（中略）
T①：（食べ終わった子に）じゃあ、歯磨き歯磨き。

4. おわりに

本研究は、3歳児が食事場面において表出する食スクリプトを捉えたとともに、幼児と保育者の食に関するやりとりの様相について明らかにすることを目的とし、対象児の初めてのおやつ場面の観察とそこで生じた幼児と保育者のやりとりについて分析を行った。その結果、おやつ場面における幼児のメインスロットは「食べる」を中心として、その前後に「いただきますという」「ごちそうさまという」という「食べる」枠組みの提示と「食べる」ことを「おいしいという」ことで意味づける行為・発話で構成されていた。一方サブスロットは、食べる前のテーブル・椅子等の準備や片付け、衛生等に関するスロットで構成され、食べるために皮を剥いたり、おかわりをするスロットの表出がみられた。メインスロットを含む幼児と保育者のやりとりでは、食事の開始を意味する「いただきます」を一斉に行ったり、多くの子どもたちが食べることを「おいしい」と意味づけるスロット表出しており、保育者が主導しつつも、子どもによって表出可能なマナーに関するメインスロットがみてとれた。その一方で、「ごちそうさま」は一斉には行われず、片付けに移行していた。サブスロットを含むやりとりでは、食べるための準備に関するスロットが多数表出されていた。さらに食べる前の消毒や食後のバナナの皮を捨てる等について、保育者から何度も言及があったことから、食べる場面において保育者が衛生や片付けを重要視していることが示唆された。さらに、保育者はバナナの「皮を剥く」ことを意図した関わりを行っていることから、おやつ場面は栄養摂取の場としてだけではなく、文化的な場と位置づけられており、それにふさわしいふるまいを学ぶ場として機能していることが示唆された。

今後、3歳児は家庭や保育施設等での食事場面を通して、さらに多様な経験を重ねていく。それを踏まえて、幼児がいかにして生活文化の担い手になっていくのか、4歳以降の幼児の食スクリプトの発達の変化とそれに対する保育者の関わりの変化について、縦断的に捉えていくことが必要であると考えられる。

本研究はJSPS科研費 JP26350040の助成を受けて行われたものです。
研究にご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。

引用文献

- (1) Schank, R. C. and Abelson, R. P. (1977) Scripts, plans, goals and understanding : An inquiry into human knowledge structures, Lawrence Erlbaum Associates., Hillsdale, New Jersey
- (2) 吉澤千夏, 大瀧ミドリ, 松村京子 (2001) 1歳児のままごと遊びにおける食に関するスクリプトについて, 日本家政学会誌, 52 (2), 147-153
- (3) 前掲 (2)
- (4) 吉澤千夏, 大瀧ミドリ, 松村京子 (2002) 2歳児のままごと遊びにおける食に関するスクリプトについて, 日本家政学会誌, 53 (6), 539-548
- (5) 吉澤千夏, 大瀧ミドリ, 松村京子 (2003) 3歳児のままごと遊びにおける食に関するスクリプトについて, 日本家政学会誌, 54 (2), 113-122
- (6) Nelson, K. and Seidman, S., Bretherton, I. (Eds), (1984) Symbolic play : The development of social understanding, Academic Press, New York, 45-71
- (7) 前掲 (2)
- (8) 前掲 (4)
- (9) 前掲 (5)
- (10) 前掲 (2)
- (11) 前掲 (2)
- (12) 前掲 (2)
- (13) 前掲 (4)
- (14) 前掲 (5)

What Do Children and Teachers in Nursery School Talk about During Snack Time?

Chinatsu YOSHIZAWA* · Kayoko UEMURA**

ABSTRACT

The purpose of this study was to examine the scripts from the children's snack breaks, as the three year olds were eating and drinking, and the aspects of the interactions between the children and their teachers. Fourteen children and their two teachers were observed during the snack time and their interactions from the perspective of an eating and drinking script.

(1) 3-year-old children showed "eating" slots in their speech during the snack time as the main slots. In addition, they showed the vocabulary related to eating, such words as "Itadakimasu" (the word before eating) and other expressions, such as "Oishii" (the word that means Tasty).

(2) The sub-slots used by the 3-year-old children during their snack time consisted of the slots related to the preparation of the melas and cleanup of the table, chairs, and floor; the hygiene before eating, as well as other slots for "peeling" and "having another serving" of bananas, for example.

(3) In the interactions where the main slots were used between the children and the teachers, all the children and teachers say "Itadakimasu" together to start to eat. Moreover, the children also used the "Tasty" slot during the snack time. It suggests that the children may show manners during the snack time with the teacher's lead.

(4) During the interactions including the sub-slots between the 3-year-old children and the teachers, in addition to the preparation for eating, the teachers frequently reminded them about sanitizing their hands before eating and them to discard the banana peels after eating, suggesting that hygiene and tidying-up are important in kindergarten. Furthermore, the results show that the teachers view snack time not only as a time for nutritional intake but also as a cultural event, during which the children learn appropriate behavior.

* Natural and Living Science ** Bunkyo Gakuin University